

# ロリータ

石川県立小松高等学校 二年 西川 友佳子

定時。五時きっかり。仕事はまあ、終わってないけどこれくらいなら家に持って帰って明日の朝までにやれるだろう。お疲れ様ですーって間延びした声に、お疲れ様でーすって間延びさせて返す。ネクタイを無理矢理引っ張って緩めて、やっぱ肩の力抜けるわこれ解放感やば、とか思いながらも歩幅が自然と大きくなって歩く速度が上がる。急がなくてもいいんだろうけど、どうせなら早く行きたい。

住宅街の方に少し入ったところにあるそれ。保育園。我が子の

迎えに来た親連中がごろごろとまあ。結構見知った顔も多い。いつもこの時間帯にお迎えに来る面子とか固定されるよな、普通に考えて。

玄関に入っすぐ、先生が俺の顔に気付いて迎えを待つその子を呼びに行つた。この時間とかもう大半の子が帰っちゃって騒がしくないのな。何となく息をついたところで、ご本人登場。ふっ、って俺の顔見て顔を緩めてくれる。あーかわいい。辿々しく靴に足を突っ込んで、そのままの勢いでふらふらと俺のほうに歩いてく

る。よしよし、って頭を撫でてやっってから先生の方を向かせた。

「ほら、先生にさよならして」

「……さよなら」

小さい声で呟くみたいに。小さい唇が細かく動くのが可愛い何のつて。それだけ言うとすぐに外へと飛び出した。俺は慌てて先生に会釈して、彼女を追う。

「ちよ、ゆつくり歩けよ倅音！」

俺が声をあげるとびつくりしたような顔をこっちに向けて、ぴたつとその場に立ち上げる。やっと追いついて隣に並ぶと、真っ黒な瞳が俺を見上げていた。

「危ないから一緒に行こうな？」

「……ん」

くいつて服の裾を引かれる。若干こっちを見上げ気味に、俺を引つ張るみたいに歩いてくれる。前見ないと危ないでしょこれ。そう思った矢先、やっぱりつんのめった彼女。

「……っ」

「いいから前見て歩けよ、危ないから」

「ん」

こくん、と小さな首肯。つられて流れるまつすぐに下ろされた髪。綺麗だ、って本気で思っちゃう俺。前に零れた髪をきちんと耳に掛けてから前を向く一連の仕草は、さすがにこの歳の女の子でも僅かに色気を帯びていた。

「……っ」

どくん、って心臓が跳ねた。なんか、息呑んじゃったんだけど。

「にいちゃん、」

「ん、ああ……ごめん」

彼女が一瞬固まった俺の顔を覗き込む。歩き出して、そつと彼女のつむじを見下ろした。彼女に歩幅を合わせて歩くのは意外と難しかったり。俺の一步は、彼女の一步と半分。歩調を合わせることは難しくても、幸せだ。

俺の家まで徒歩十分。今更だけど、自己紹介させてもらえるかな。

俺はまあ、普通に会社勤めしてるフツーのお兄さん……まだお兄さんって言わせてもらえない歳だと思う。嫁さんもいますし。良い感じに結婚生活を送ってる。

そして彼女、今一緒にいる小さなお姫さま。ゆきねちゃん。彼女は娘じゃなくて、うちの嫁さんの姉さんの娘——俺の姪っ子だ、つまり。帰りが夜遅い義姉さんの代わりに、俺が嫁を迎えに行つて、我が家で晩飯と風呂を済ませて、夜中にお勤めを終えた義姉さんが迎えに来る。これがウィークデイの基本パターン。ちなみに義姉さんはシングルマザーだったりする。旦那は、義姉さんが妊娠したときに逃げたらしいから、俺は顔も知らない。

そしてまあ、良い子なんですよ、倅音は。口数少ないけどそれなりにやんちゃだし、くるくる変わる表情は見ていて面白いし可愛い。俺にもしつかり懐いてくれて、にいちゃん呼びしてくれてるのがまた愛しい。

……そしてまあ、俺はこの子に惚れちゃってる。

ちよつと待ってくれ、通報する前に話し合おう、な？　ここは

ひとつ、穏便に事を片付けようじゃないか君。そりゃ、俺にはちゃんと嫁さんいるよ？ 別に仲が悪いわけでもないし、つーか仲良いほうじゃね、みたいな。夫婦円満だよまじで。俺の欲求満たしてくれる良い嫁さんだよホント。全然、お世辞抜きで。じゃあ何でって話なんだけどな。俺としても、どうしたもんですかねって感じで。別にロリコンじゃなかったし。今までそういうことにも一切縁が無かったし。つか、だから普通に結婚してるしな。嫁さんは年下だけど、そういうことじゃないよな。

ただひとつ言い切れるのは、俺が今この横に並んでる小さなお姫さまに対して抱いている感情は、確かに紛れもない恋愛感情だということ。恋愛感情と性欲の違いって当然あるよな。だって俺、倅音に欲情しないし？ 嫁さんには、まあ、あの、うん。する。嫁さんは変わらず愛してるし。変わってないんだ、そこらへんは。ただ、純粹に、倅音が好きって感情。誰にも、特に本人には、絶対に伝えられるわけもなくて。

「……ん」

俺の服の裾を握りなおして、ちらっと俺を見上げる彼女が可愛くて愛しくて尊い。親愛とは違うことなんて、俺が一番解ってる。

「にいちゃん、」

「ん？」

「よるごはん、なに？」

「あー……嫁が今日はオムライス作ってやるつつつてたぞ」

「おねえちゃんがつかくるオムライス美味しすぎ」

頬を緩ませる彼女に、思わずキュンキュンする。こんな笑顔見

せられたら、俺じゃなくても落ちるだろ。くらくらするだろ。ポーカーフェイス全力装備しなきゃやってられねえだろ。ほんとに俺しかこの子のこと狙ってないの？ まじで？

家に着くと、真っ先にキッチンに立つ嫁のもとに駆けていく倅音。そんな後ろ姿がまた可愛い。

「おねえちゃん、オムライス？」

「おかえりーそうですよ、オムライス作ったですよ」

並んで話す二人の後ろ姿はとも似ている。DNA感じるね、なんか。目がくりつとしてるところも似てるし。

「すぐたべていい？」

「手洗いうがい！ あとお弁当箱出しといてください」

「ん！」

鞆を投げ出す勢いで洗面所に消える。くるりと振り返った嫁が俺見て首を傾げた。

「なんだか気持ち悪い顔してますけど」

「気のせいだろ」

「それはそうとオムライス食べますか？」

「そうする」

「では手洗いうがいを」

……うちの嫁可愛いけど、結構不思議ちゃんな。もう三十路目の前の俺に手洗いうがいはねーわ。未だに敬語で話してるあたり、大学の頃から変わってなくて可愛いんだけども。

「にいちゃん」

ふと足元から聞こえる彼女の幼い高い声。見下ろすと、小さく

眉根を寄せていた。

「おねえちゃんが、にいちゃんと一緒にたべてっていった」

「うい、ちよい待ち。俺も手え洗ってくるわ」

「ん」

こくん、と頷いてキッチンへ戻っていく。

こんな何気ない会話にまさか俺がいちいち心臓を跳ねさせてるなんて、あいつらに知られるわけにはいかない。こーゆーのをとつくに学んじやってる俺、結構偉くね？ 誰か褒めてくれよ、なあ。

そして今日もまた、俺は愛しいお姫さまのもとへと馳せ参じる。こうやって平日毎日会えるって、幸せとしか言いようが無い。

毎日幸せの沸点なのにマンネリしないのは恋の魔法だと思えない。いつも新鮮に胸高鳴らせちゃって、恋愛覚えたての女子コーセーかよ。

保育園の玄関に顔を出すと、先生が彼女を呼びに行く。今日の晩飯はカルボナーラだったか。毎日のように帰り道で倅音が聞いくるので、朝のうちに俺が嫁さんに聞いとくのが習慣になつてる。朝から晩飯のことちゃんと考えてるあたり、うちの嫁さんまじ嫁っぽいわ。あんなんだけど。

「……にいちゃん」

「おー」

おかえり、とその低い位置にある頭に手を置こうとして、

——知らない声が、邪魔をする。

「ゆきね、もうかえんの？ また明日なー！」

甲高い、でも確実に、これは、

驚いたような顔をしながらも、彼女は声をかけてきた男子に慌てて手を振る。

「あつ、ばいばい……」

「……」

上擦った小さな声。焦るような、恥じるような。俺の、知らなかった声。

「……今の、誰」

自分でも驚くくらい冷めた声が出た。対照的にほんの少し熱を帯びたような彼女の声に、俺が気付かないはずが無く。

「……なかよしなの」

「へえ……」

撫でるはずだった頭に、そっと手を置く。つむじのあたりが温かい。俯き気味の彼女に非は無い。悪いのは、あの、

「最近ずっと一緒にあの子といるんですよ、倅音ちゃん。前まで男の子とあんまり遊ばなかったのに」

「そうですか」

先生の言葉に空っぽの相槌。ただ内容は聞き逃せるものではなかった。

途轍もない、嫉妬心、独占欲、苛立ち、焦燥心。ふざけんよ、勝手に、勝手に、俺のに近寄ってんじゃねえよ、あ？

「……にいちゃん、かえろ」

早くここを立ち去りたそうな顔をされる。理由は何となく察しが付いたし、だからこそ俺の膝の力は抜けていった。ぐいっと俺

を引つ張る弱弱い手。その手に逆らえなくて、俺はふらりと彼女の後ろを歩く。

駆けていく彼女に追いつこうと大股で歩く。一步一步が、重い。足を上げるにも下ろすにも、もの凄い重さがまとわりついてきた。そのせいでいつまで経っても彼女に追いつけなくて、結局家に着くまで一度も彼女と並んで歩く事はなかった。

家に入ると、嫁がまた首を傾げて俺を迎える。

「どうしました？ 大学のときに、高校から付き合ってた彼女と別れたとか言ってたときに近い顔してますよ」

「……んなことあったな、そーいや」

「そのとき慰めたのが私ですので」

「そーっしたね」

精神弱つてるところをこいつにつけ込まれたんだって。にしても、嫁はまじで俺のこと見るのが上手いな。的を射すぎててこえーわ。

「で、どうしたんです？」

「いや、大したことじゃねーから」

「お気に入りの女優さんが結婚でもしました？」

「……まあ、んなどこっす」

自然と敬語になる俺。これ以上は何も言うまいと心に決め、嫁に言われる前に手洗いうがいをしに向かう。

「何だったら今夜ベッドで慰めますからそれまで泣くの我慢ですよーっ」

「……頼みますわ、まじで」

俺を追いかけてきた声に縋りながらため息。そして、洗面所から出てきた俺をこんな事にしてくれた彼女とすれ違うとき、慌てたようにズボンを押まれた。

「にいちちゃん、」

「どしたー？」

「おねえちゃんには、ないしょね」

最初、何のことか解らなかった。が、次第に上気してくる倅音の顔を見て、舌打ちしたい気分と共に理解する。

「……さっきの奴か？」

「……っ」

俯いての、無言の肯定。そう、この子は何も悪くないし、相も変わらず俺の目に映るのは可愛く愛らしいお姫さまだ。こうやって恥じらってる顔を見て、いつの間にかこんな顔出来るくらい成長してたんだな、みたいだな。それでも言葉の紡ぎ方が投げやりになつてしまう俺を、あんたは許してくれるよな？

「わーっつたよ、言わねえから安心しろ」

「……さんきゅ、にいちちゃん」

ほっとしたように、ぼそっと呟く。そして、不意に俺の目を見て、

「にいちちゃん好き」

「……………」

純粹に、潔白に。

少しでも邪な事を考えた己が恨めしくて、僅かな自己嫌悪に陥る。そして気付いてしまう。今に至るまで、少なからず「そうい

う」感情を彼女に持ち合わせていた事実。

「……俺も」

そう呟いたとき、彼女はとっくに俺の前になかった。それでも、彼女がその場にいらなくても、どうしても、

自分の想いを口にしたいくて、

「……ッ」

ギリ、と奥歯が軋んだ音を立てる。分かっている、判っているんだよ、本当に解っているから。

——だから、辛いんだよ。

口の中で広がる鉄の味。これが俺の恋愛の味だって言うのなら、味わえる俺は幸せ者だ。

晩飯だけ食って部屋で落ち込む俺。ちよつと今だけ自己嫌悪に陥らせてくれ。病み期なう。二十二時を回った頃、玄関の開く音がした。それから嫁の声。義姉さんがお迎えに来たらしい。姉妹が喋る声に、何となくそつと聞き耳を立てた。

「どうだった？ 我らが姫のご様子は何？」

彼女のことを姫と呼び出したのは義姉さんだ。俺もそれに倣ってお姫さまと呼んでるわけだけど。それに答える嫁の音が楽しそうだったらありゃあしない。

「最近倅音変わりましたよね」

「ほう？」

嫌な予感しかしない。そしてその予感を忠実に現実へ映してくれるあたりまじで俺の嫁。

「私には分かりますよ、あれは恋する乙女です」

ほらな。ぷつりと何かの糸が切れた俺。義姉さんかというと、一瞬間を置いて呆けた声。

「今ドキのちびっ子は進んでるねーやばいねー」

「ですねー最近は園児同士でもお付き合いする子はするらしいですよ」

「はーん、大人の階段昇るのが早いぜ！」

「微笑ましいですよねえ、こういうの」

「そうか……姫に王子が現れるか……」

あーもう何もしたくねえや。この嫁が恋するうんたらとか言っただからもう、俺のお姫さまは恋するなんちゃらんなんだろう。嫁が言ってるんだもん。確定。泣いた。

俺はのっそり立ち上がり、ふらふらと嫁と義姉さんのもとに顔を出す。

「おお、義弟くん」

「お疲れさまです」

義姉さんが俺の顔を見て首を傾げる。

「また今日は随分と生気の無い顔を……具合でも悪いのかね」

「違いますよー好きな女優さんが結婚したから落ち込んでるんですよー」

「……言うなよそれ」

事実じゃねーし、事実だとしたらくっそ恥ずいだろ。いい歳した既婚済みの奴がいちいちそんな事で落ち込む方が珍しいわ。しかしシングルマザー義姉さんにそんな事が分かるはずもなく、

きよとんとした顔をするに、にへら〜と頬を緩ませた。

「はんはん、じゃあせいぜい今晚あたり妹に慰めてもらうんだな。明日に響かない程度に♥」

「……了解ッス」

この姉妹、思考は結構似ているらしい。

「となると？ 妾と妾のきやわいい姫はおじやま虫というわけだね！ よっしや！ 今日のところは引き上げるZ O I ☆」

しゅばつと寝室で寝ていた倅音を抱き上げて玄関へ向かう。素早い動作なのに娘を起こさないあたり、母は強しだよな。ただ俺からすると、この人からあの娘が産まれたっていうのがどうも納得ならんのだが。

「そいじゃ、悪いが明日も頼みます。グツナイ！」

ボタン、とせわしなくドアが閉まり、なんだか取り残されたような気分になる俺と嫁。

「……………」

沈黙の中、嫁が小首を傾げて俺を見る。

「……………ベッド、行きますか？」

「……………そうすつか」

正直、嫁に慰めてもらっても変わらんと思うのだが。でもまあ、たまにはそういうのもいいんじゃないでしょうかって事で。

「で、結婚した女優さんって誰です？」  
うるせえ黙って鳴いてろ。

定時。五時きっかり。色々考え事しながらの一日で、ミスしま

くつたけどしょうがない。何考えてたかって？ んなこと決まってるじゃん聞くなよ。また、いつも通りお疲れ様ですーって声にお疲れ様でーすって返して、俺を待つお姫さまのもとへと急ぐ。ああマジで俺の王子様み深いわ。そして、今日は一つ決めていることがある。期待と不安と幸福感と罪悪感を俺の中でぐちゃぐちゃに固めた決意。いつもだったら真っ先に緩めるネクタイの事も忘れるくらい焦燥感に支配される。果たしてそれが俺にとって、良いものなのか悪いもののかなんて判ったもんじゃやない。ただこれから起こりうることを考えて、脚がすぐみそうになるのを堪えるだけだ。

保育園。顔を出す。先生に呼ばれる、俺の愛しい愛しい愛しい。

そしてその後ろでさも当然かの如く手を振る若干一匹。

「またあしたな！」

「……………うん。ばい、ばい……………」

後ろをわざわざ振り返って俯き気味に、それでもちゃんと手を振る彼女。不思議と、それを見た俺の中に芽生える感情は薄いものだった。手を振るその指が可愛いな、とかそういう。

「にいちゃん、」

「おう、おかえり」

俺の服の裾を掴んだ彼女の頭を撫でる。ふにやりと俺に向かつて笑いかけてくれる姿はどう見たって可愛くて。やっぱり好きだなーって。俺の恋心は相変わらずらしい。

「っしやー帰るぞ」

「……………ん」

先生にぺこりと頭を下げ、てこてこ俺の横を歩き出す。健気で、愛しい。

「……ほら」

「……ん」

彼女に向かって手を伸ばすと何の疑いもなく握ってくれる。きゅっと力を込められて、その甘さで胸が焼けそうになる。その苦さで喉が焼けそうになる。

「にいちゃん、よるごはん」

「確か唐揚げつつつたぞ」

「やった」

ぴよんと跳ねた拍子に手が離れそうになって、俺はその小さな手を逃がさないように、感じるために、握りなおす。一瞬、倅音はきよんとした顔を俺に向けたがすぐに何とも無いように前を向く。俺は息を吸って吐いて、また吸う。口の中が異常に乾いていた。

「……なあ、倅音」

掠れて震える俺の声。

「ん？」

いつの間にか早くなっていた俺の歩調に合わせようと、俺の手に縋りながらも必死についてくる倅音。彼女はこれから起こる事なんて何も知らないし、知らなくていい。

「一個、頼んでいいか？」

「……うん」

細い首がこくと前に折れる。ダメだろ、頼み聞く前に承諾す

るとか。変な奴に引つかかるだろ。俺がまた味をしめて、何かするかもしれないのに。断れよ、自分のために。断ってくれよ、俺のために。

「今だけ、」

何を言おうとしてるんだろう俺は。こんなこと言っても許されるもんじゃ無いってのは解ってたはずだろ。何なんだよ、俺。

かろうじて残った理性が必死に俺の口を閉じようとする。そうだ、許されない、そんなこと俺が一番許せない。言って傷付くのはもちろん彼女と俺だ。それでも、それ以上に、そんな理性をくだらないと思えるほど、比べものにならないほど、

——言わない方が、辛い。

俺が、壊れる。壊れたら、もう、何も残らないから。

だからこれは彼女のためでもあるんだ。壊れた俺の破片が彼女に刺さらないように。何も残らない俺から倅音を守るために。

「……今だけでいいから」

——彼女のために、俺は許されない事を口にするんだ。

「俺のことだけ、考えて」

「……」

思わず繋いでいた手に力が入り、それに驚いたような倅音が俺の顔をじつと見つめて立ち止まる。その目には、戸惑いの色がぼんやりと浮かんでいた。お互いにその場に立ちつくして、見つめ合う。たまらなく幸せで苦しい俺と彼女だけの時間。ああ、死にそうだよ、ほんと。

「……ごめん」



何も言えなくなってる倅音が、何を感じて何を考えてるのか俺には分からない。ただこれは、彼女にとって毒でしかないなんて言われなくても解ってる。

「……にいちちゃん？」

俺を見つめてくる彼女の瞳に映る俺は、切羽詰まった情けない顔をしていた。こんなときですら、今の彼女を抱きしめたいと考えてしまう。あーもう俺ダメかも。

「……わりい、何でもなかったわ」

諦めよう。もう十分だ。欲望を口に出来たんだから、俺は幸せだ。半ば自分に言い聞かせるように、何度も心の中で繰り返す。なあ、俺は幸せもんだろ？

諦めるんだ、今日で。こんなこと続けても意味が無い。そうだな、明日から嫁にお迎え頼んでみるか。倅音と二人きりの時間なんて俺にもう必要ないだろ。恋心がそう簡単に捨てられるものじゃないことくらいよく知ってるけど、だったら努力して捨てればいいだけだ。

この、今繋いでる手も、もう。力を入れてしまっていたそれから、そつと指を緩めて離そうとする。離そうと、して、

「……あ」

握りなおされる。

「にいちちゃん、手」

「……何だよ」

「つなぎたい」

ぎゅっと力を込められる。そんな力、俺からしたら何でもない。

だけど、振り払えない。どうしても、振りほどきたくない。

「ねえ、にいちちゃん」

じつと俺を見る真っ黒な瞳。そんな目で見るなよ。たつた今諦めるって決めた俺の心を溶かすような目。また、惚れそうになるから。もうやめてくれよ。

目を逸らそうとしたところで、それを拒むように倅音が口を開く。

「ずっと、してるよ」

「……は？」

何がだよ。意味分かんねえよ。俺をどうしたいんだよ。俺は、おれは――

「いつつも、かえるときは、」

――にいちちゃんのことしか、かんがえてないよ。

「……ッッ」

駄目だ。どうすればいいんだろう。その囁くような声で生まれた、新しい、異色の恋愛感情。

「……ありがとな」

繋いでるのは反対の手で倅音の頭を撫でる。猫のような顔をして俺に撫でられる倅音。ぶわりと俺の中で広がる彼女への感情。

「おねえちゃん、まってるよ」

「だな。さつさと帰るか」

繋いだ手の人差し指を彼女の掌に這わせる。びくりと驚く彼女は、それでも嫌がることと拒否することを知らなくて。そこにっけこむ最低な俺。

きっと明日も俺はこのまま、愛してしまった彼女を迎えに行くんだろう。きつとこの日常を手放すことは出来ないんだろう。その代償にせいぜい苦しめばいいんだよ、俺なんて。

倅音の手が、次第に俺と同じ温度になっていくのを感じた。



## 選評

森松和風

(奨励賞)

『ロリータ』

初っぱな感じたことは、二十七歳の主人公の幼さである。それは彼の語り口調からもたらされた。しかしやがてそうではないことに気づく。彼の言動、心模様は、まことに聖人君子。理性的な青年であった。しかし描き切れていない気がする。普通の大人の二十七歳の男の生理というものをもっと大胆に、いやらしく描いてくれたらよかった。今どきの時代風刺を、きつちり盛り込んで、この主人公を悪役にして書き直してみたら、問題小説になるかもしれない？

斬新、大胆な文体に最初は興味を抱かされる。ずっと主人公の独白があり、食傷気味になるのだが、中盤からは読者を物語に引き込むことに成功している。

手を繋ぐということ以外は、このロリータに対して、まったくプラトニッククラブの主人公。これから彼女が成長していったらどうなるの？ という興味を抱かせての結末も成功している。早くも小説に挑戦した作者の前途にエールを送りたく奨励賞とする。